

10) タバコ=煙草

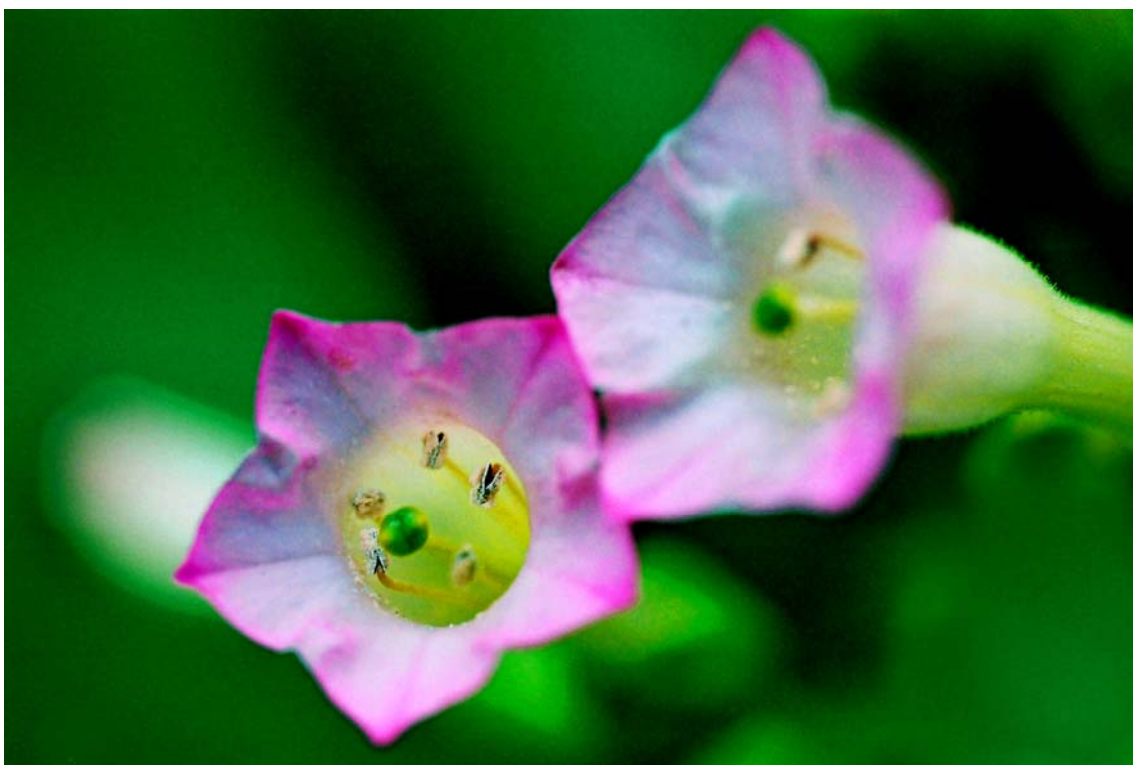
タバコはナス科の多年草で、原産地は南アメリカである。現在では世界の各地で栽培されており、温帯地方では一年草として扱われている。高さは1.5~3mに達し、全草に腺毛が密に生え、樹脂を分泌する。葉は長さが30cmほどの楕円形で、葉縁は波状し、30~40枚が対生する。夏から秋にかけて茎上部に総状花序を付けて、淡紅色で細長いラッパ状の花を多数開く。果実は卵形で萼に包まれ、中には小さい種子が多数含まれている。和名の由来はポルトガル語の『tabaco』またはスペイン語『tabacco』の音によるもので、別称としてはタバコグサ、タバコソウの他、タバコ、オモイグサ、ワスレグサなどがある。学名は『*Nicotiana tabacum*』で、属名はフランスの外交官であったジャン・ニコの名に因み、種小辞はタバコのインディアン名である。またイギリスでの呼称は『tabaco』、フランスでは『tabac』である。ところで外交官ジャン・ニコは、タバコの種子を手に入れてフランスに初めてタバコをもたらした人物として知られている。これを皇太后カトリーヌ・ド・メディシスが嗅ぎタバコとして用いたことから、フランス宮廷でタバコが流行することとなった。16世紀中頃のことで、彼女(01-03-10-7 マーガレットの項参照)は『聖バーソロミューの大虐殺』を指揮した中心人物でもあった。

中央アメリカのインディオは、紀元前よりタバコを吸う習慣があったといわれており、5世紀ごろのマヤの遺跡にはタバコを吸っている神官のレリーフが描かれている。15世紀になると、この習慣はコロンブスによってヨーロッパに伝えられ、以来喫煙の習慣は急速に世界に広まった。当時は主にパイプのような喫煙道具を用いて吸っていたが、今では紙巻きタバコが主流となっている。

紙巻タバコはタバコ葉を乾燥させて発酵させたものを細かく刻んで、紙で巻いたもので、これと近いのは葉巻タバコである。他方、紙で巻かないものに刻みタバコと嗅ぎタバコがある。しかしタバコの喫煙者には、通常よりも肺ガンや咽頭ガン、慢性の気管支炎などの発生率が高いことが近年の研究でわかっている。また妊婦や胎児への影響も無視することが出来ず、最近では健康に有害なものとして、禁煙の方が重視されている。1976年には新幹線で禁煙車両が導入される一方、今ではオフィスでは分煙が主流となり、この動きはレストランや公共の建物全域に拡大されている。日本にタバコが伝えられたのは永禄から天正年間(1558~1592年)のこととされ、まず南蛮船によって九州に伝えられた。これが江戸時代の寛永年間(1624~1644年)になると一般にも普及して、喫煙の習慣は広く定着した。当時はもっぱらキセルによる喫煙で、喫煙道具に工夫を凝らしたものがいろいろと考案され、工芸品としての価値があるものも生まれた。特にタバコ盆や、タバコ入れなどは桜の皮で細工したもの、漆を施したもの、またキセルなどは金具に銀などを用い、彫刻を施したものなどが作られるようになった。一方、日本で葉巻タバコが登場するのは、明治時代になってからのことで、1872年(明治5年)のことであった。



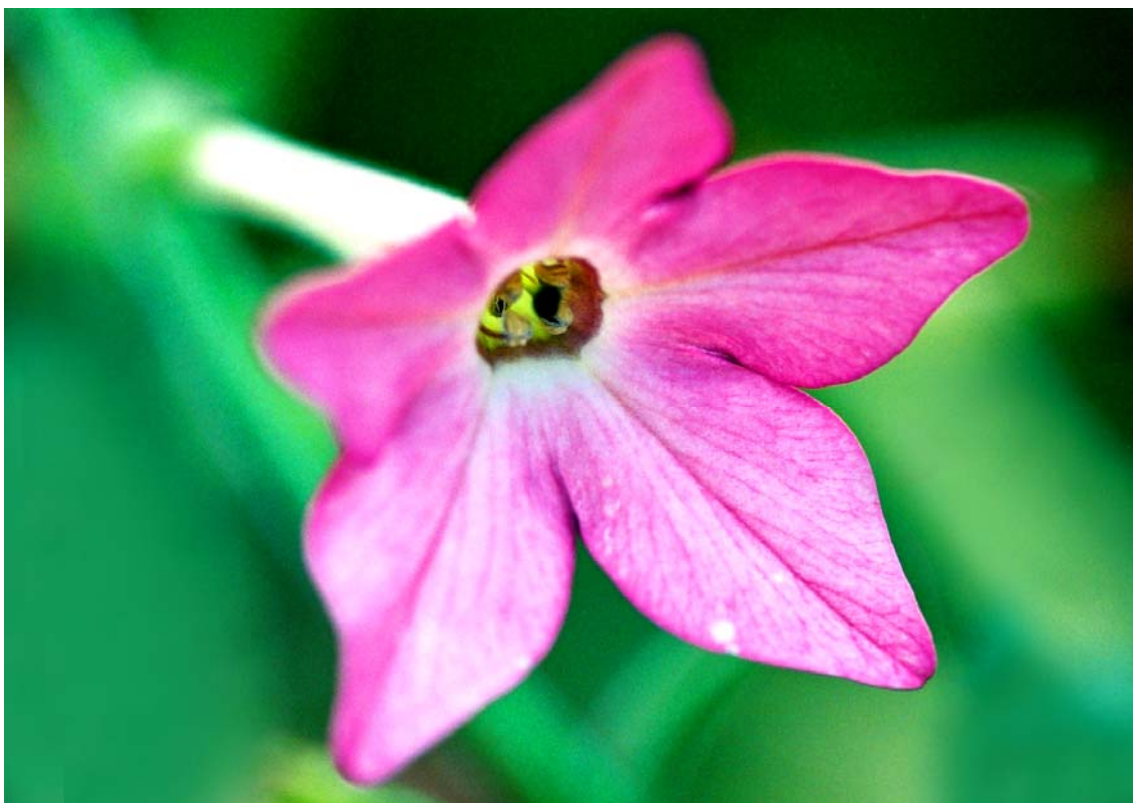
咲き始めたタバコの花、あの煙を出すタバコの花とは思えないほど、美しい花である。近縁種には花タバコもある(東京都小平市薬用植物園)。



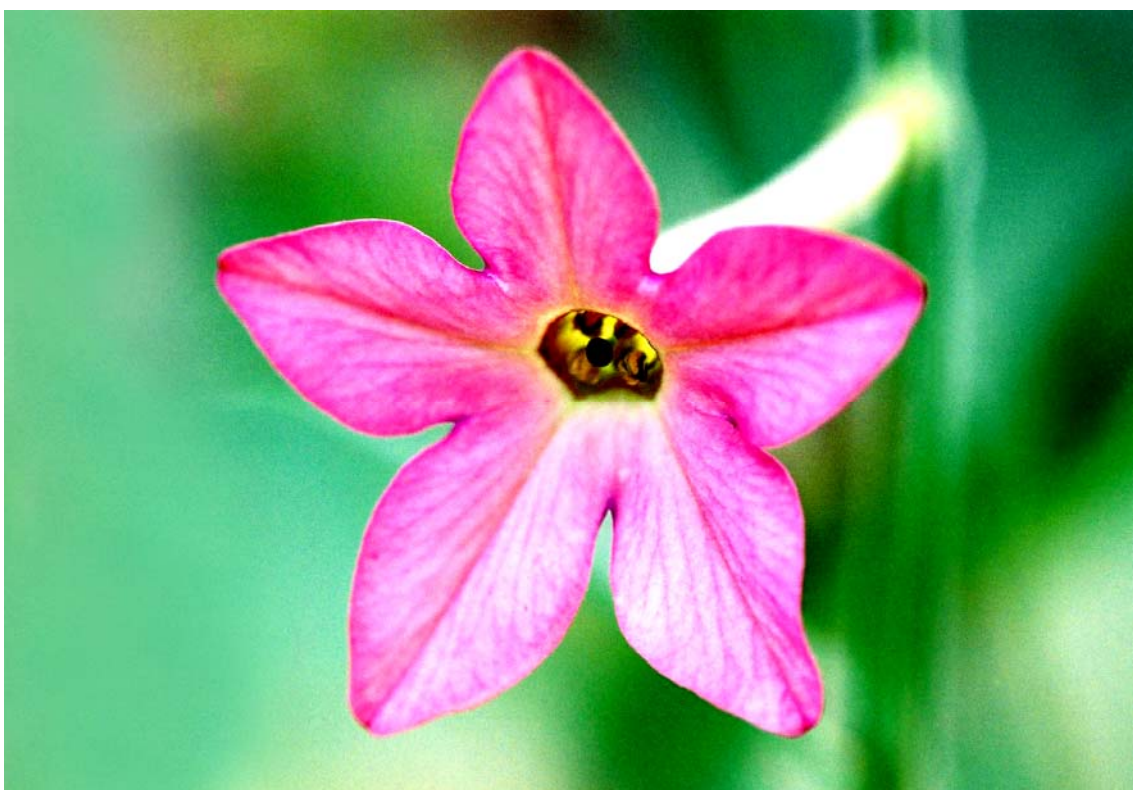
淡紅色が美しいタバコの花(東京都小平市薬用植物園)。



タバコには白い花を咲かせる品種もある(さいたま市緑区)。



ハナタバコはブラジル原産で宿根タバコとも言われている。学名は『*Nicotiana glauca*』である。



美しい花を咲かせるハナタバコ。紅色のほか、紫、白、黄色などがある。比較的乾燥した陽当たりを好むものの、多肥は好まない(栽培品)。

[目次に戻る](#)